



一般社団法人

# 日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

11

2019.01

## ▶ 理事長あいさつ

一般社団法人日本肩関節学会理事長 池上博泰



2018年10月より、一般社団法人日本肩関節学会の理事長を拝命いたしました池上博泰です。正会員数が1,500名を越え、40年以上の伝統のある本学会の運営にたずさわりますことに、身の引き締まる思いがいたします。柴田陽三前理事長の後任として、誠心誠意、本学会の発展のために尽くす所存でございます。皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

日本肩関節学会は1974年に「肩関節研究会」として発足し、その後名称を、「日本肩関節学会」と変え、2014年からは一般社団法人となり法的にその責任と義務が明確になりました。定款にうたわれている“肩関節医学の進歩普及に貢献し、もって人類の福祉に寄与する。”という目的を遂行するために皆様とともに努力してまいりますと存じます。

現在、日本肩関節学会の国際化を進めるために米国肩肘学会、欧州肩肘学会、韓国肩肘学会との交換留学生制度を実施しております。募集状況は学会ホームページ上に掲載していきますので会員の皆様には是非ふるって応募を御願ひ致します。私事で恐縮ですが、2004年にヨーロッパ肩肘学会との交換留学生に選んでいただき秋田の皆川先生と一緒に7ヵ国を訪問して、肩関節の手術だけでなく多様な文化や価値観に直接接する経験を得られたことは、たいへんな財産となっています。さらなる国際化のために、日本肩関節学会学術集会の一般口演のスライドとポスターは英語で作成されることが求められ、国際シンポジウムでは口演・討論ともに英語でなされるようになりました。会員の皆様におかれましては本学術集会でこの英語による発表・議論に積極的に参加していただけたらと思っています。

2019年9月は3年に1回開催されている国際肩・肘関節学会がブエノスアイレスであり、また2019年10月には米国肩肘学会がニューヨークで開催されゲスト国として日本が選ばれています。ぜひ、会員皆様に参加していただけたらと思っています。

2014年4月から使用開始となりましたリバーズ型人工肩関節が導入されて4年半が経過し、徐々に症例数が増加しております。リバーズ型人工肩関節は本邦で臨床試験を行わないで保険収載された初めての人工関節です。医師側が作成した厳しいガイドライン、講習会とドライラボの実習受講義務、全症例の登録制度により、先行する海外よりも上回る成績をもたらせるものと考えております。当初のガイドラインにもあるとおり、導入後5年経過する2019年3月末には、ガイドラインや実施医資格など、あらためて見直す予定としております。

本学会の目的である肩関節外科学の進歩普及に貢献して行くためには、代議員の業務は大変重要です。現在11の常設委員会と一つの特別委員会、二つのワーキンググループが活動しています。これらの委員会は代議員だけでなく一般会員の皆様にも協力を頂いており、広く意見を取り入れながら活動を行っております。学会に対する御意見・御要望がございましたら事務局までご一報下さいましたら幸いです。先達が築かれました本学会の伝統を守りながら、一層の発展を目指していきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。



日本肩関節学会 理事・監事

左から

今井晋二理事、伊崎輝昌理事、橋口宏理事、菅谷啓之理事、相澤利武理事、岩堀裕介副理事長、池上博泰理事長、望月由理事、高瀬勝己理事、中川照彦監事、中川泰彰監事

## ▶ 前理事長あいさつ

前理事長 柴田陽三



日本肩関節学会員の皆様こんにちは。昨年10月に一般社団法人日本肩関節学会の理事長を退任しました福岡大学筑紫病院の柴田と申します。会員の皆様の御支援のおかげで無事理事長職を全う出来ましたこと紙面をお借りして御礼申し上げます。

私は任意団体時代の1992年から2009年までの18年間、日本肩関節学会の事務局長を務め、2012年10月から理事に就任し、2016年10月からは理事長を務めさせて頂きました。長年にわたり学会のお世話をさせて頂く事で、本学会の発展を間近で感じる事ができました。私が事務局担当を開始した1992年当時は会員数が1,175名で、2009年には1,356名へ増加(2018年7月末で1,815名)し、また委員会数も当初、編集委員会、国際委員会、JOA score再検討委員会、高岸直人賞決定委員会の四つしかなかったものが、QOL評価検討委員会(現在解散)、社会保険委員会、教育研修委員会、学術委員会、広報委員会、財務委員会、倫理・利益相反委員会、定款等検討委員会(現在は定款等運用委員会)、リバース型人工肩関節運用委員会、選挙管理委員会、手術手技認定のあり方ワーキンググループ、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループが加わり合計12の委員会と2つのワーキンググループが活動しております。大学の医局に事務局を設置し、担当医師が一人で研究の合間に事務を行うような業務量でなくなりました。また迅速な業務の遂行も必要とされるようになりました。任意団体時代は毎年交代する学術集会長が理事長職を兼任し、学会業務を執り行っていました。会長が毎年交代するがゆえ業務に慣れる頃には任期が終

了するといった継続性上の問題も指摘されるようになりました。そのために、学会全体の業務に責任をもつ理事長職と学術集会の開催に責任をもつ会長職の業務を分離する必要性が生じました。学会組織を会長・幹事制度から理事長・代議員制度に変更し、後者を一層の社会的責任を明確化するために一般社団法人化する事と致しました。私はそのような激動期に、理事の1期目は定款等検討委員会を担当し、法人化のお手伝いをさせて頂きました。2期目は財務を担当し、3期目は理事長を拝命致しました。任意団体時代から2014年7月に一般社団法人化という本学会の激変期に微力ながら貢献出来たことを大変光栄に存じます。昨年10月からは、池上博泰先生が新理事長に就任され本学会の一層の発展が期待されます。私同様、会員の皆様におかれましてはよろしく御支援賜りましたら幸いです。なお、私自身は今後とも代議員として本学会の発展に寄与してまいりますので今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## ▶ 新理事・新監事就任あいさつ

### 副理事長 岩堀裕介

この度、日本肩関節学会の二期目の理事に就任させていただきました岩堀裕介です。本学会に入会して30年、幹事(現代議員)に就かせていただいて10年の年月が経過しました。現在、日本肩関節学会は、理事・代議員制度、一般社団法人、事務局の外部委託、機関雑誌「肩関節」の電子ジャーナル化といった大きな変革が定着し、比較的安定した運営が行えています。これも理事長として二期を全うされた柴田陽三前理事長のリーダーシップによるところが大きいと思われまます。私は昨年度まで財務委員会担当理事を務めさせていただき、林田賢治委員長、委員の先生方、吉井宏文外部アドバイザーと共により透明性の高い財務管理、経費節減の徹底、確実な収入の確保のために、決算および予算案の作成のほかに、対面会議からWeb会議への可能な範囲での移行、会員連絡方法のハガキ使用の削減、賛助会員の新規募集活動などを行いました。そして、2018年度から理事会も新体制となり、池上博泰先生が新理事長に就任されました。私は財務委員会、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループ、学術集会検討ワーキンググループの担当理事を拝命いたしました。財務委員会に関しては、これまで同様に林田賢二委員長・新委員の先生方・柄澤徹外部アドバイザーと協力して、財務的に健全な学会運営ができるように尽力して参ります。また、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループにつきましては、2004年から日本肩関節学会と合同開催されている肩の運動機能研究会の今後の方向性を、浜田純一郎委員長や新委員の先生方そして研究会のメンバーの先生方と検討を進めたいと思います。学術集会検討ワーキンググループでは、学会の表舞台である学術集会を、法人としての規範の中で魅力あるものにするために、過去の学術集会会長経験者の先生と今後の会長予定の先生が意見を出し合っていければと考えています。どうか宜しくお願いします。

### 理事 相澤利武

この度日本肩関節学会の理事に就任させていただきました。私が大学を卒業後35年を経過し、人口動態、生活様式の変化とともに肩関節に関する医療の背景、求められる質も変わってきています。

私の勤務する病院は、地方の中核病院であり、大学病院とは距離的に離れた地域に位置しております。また地域内に他の大きな病院はなく一次的な整形外科診療から専門的な診療まで担当しております。地方は医師不足の影響を受けており、私も管理的な仕事だけではなく診療の現場に立ち、直接診察したり他の担当医に指示をだしたりしています。このため時間的には大変厳しい環境ですが、直接現場に触れることにより時代の変化を感じることが出来ます。これまで田畑二郎先生の後を継いで肩、股関節を主に地域医療に携わり、その中から得られる結果を基に臨床的な研究を行い発表して参りました。統計が示すとおり地方の高齢化は進行しておりますが元気で活動を



続けておられる高齢者も多くなっています。高齢者でも生死に関わる医療のみではなく、生活の質の改善が求められています。近年は腱板断裂性関節症などの症例に対してリバーズ型人工関節による治療を多数行ってきました。このような海外から導入される新しい技術は、これまでにない成果をもたらします。良好な結果を得るためには新しい手法の背景となる理論をよく理解し、手技にも習熟し、欧米とは異なる日本の体格に適応していくことが重要と考えます。ただいたずらに症例数を増やすのではなく、予想されたり、発生した問題を解決するための研究を施行し、その結果を反映させて更なる改善を求めていくことが必要と考えています。

これから教育研修委員会、手術手技認定のあり方ワーキンググループを担当いたします。担当委員の先生方と共に頑張っていきたいと存じますので宜しくお願い申し上げます。

## 理事 伊崎輝昌

この度、日本肩関節学会理事を拝命いたしました伊崎輝昌でございます。皆様の負託にお応えできますよう、全力を尽くす所存でございますので何卒よろしくようお願い申し上げます。

理事会は、役員改選に伴い、池上博泰理事長の新体制となりました。私は、高岸直人賞決定委員会、定款等検討運用委員会を担当させていただくこととなりました。

高岸直人賞は、45歳以下で過去の受賞者を除く当該年の学術集会発表論文から選考を行います。投稿雑誌の制限を廃して以降、優れた英文論文が審査対象となっていることは大変喜ばしく思っております。一方、同時に選出している Best Abstract16には、高岸直人賞の対象ではない46歳以上の正会員の演題も選出されております。これら優れた演題も英文論文として情報発信ができるようにすることが今後の課題と考えております。

定款をはじめとした各種規則等を整備し、適切に運用できる状態にすることは重要です。これまでの事務局長・事務局付幹事、定款等検討委員会委員、選挙管理委員会委員長の経験を活かしながら活動したいと考えております。

これまで培われてきた本学会の伝統を継承し、さらなる発展ができますよう努力する所存でございます。なにとぞご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 理事 今井晋二

この度、新たに日本肩関節学会の理事に就任しました滋賀医科大学整形外科の今井でございます。

私は1989年に滋賀医科大学医学部を卒業後、当時の福田眞輔教授主宰の滋賀医大整形外科学教室に入局し、1994年に大学院を修了して医学博士号を取得しました。この間脊椎外科をご指導いただきました。その後、ヘルシンキ大学医学部整形外科学教室へ留学し Santavirta 教授のもとで人工関節の基礎的臨床的研究を行いました。帰国後、日本学術振興会特別研究員に推薦頂き、アムステルダム自由大学で骨代謝の研究に従事しました。2001年に帰学後は上肢・末梢神経班のチーフとして、そして2006年からは肩に特化して診療を行って参りました。2015年8月松末吉隆教授の後任として第4代滋賀医大整形外科学講座主任教授に就任いたしました。

日本肩関節外科学会は1974年に肩関節研究会として発足して40有余年、世界で最も長い歴史と多大な実績を有する伝統ある学会です。その目的として「肩関節医学の進歩普及に貢献し、もって人類の福祉に寄与する」が挙げられています。我が国の肩関節外科は、手術に特化するだけでなく、保存療法を重視する姿勢を大切にしてきました。さらに研究の分野では再生医療など先端医療を担う研究も要求されてきました。

一方、昨今では画像診断技術の向上と並行して、肩関節鏡による診断能力が飛躍的に向上しました。肩関節鏡による鏡視下手術も、ほぼ確立されたといっても過言ではありません。世界で最初に関節鏡を開発した歴史を持つ我が国の整形外科医には、この肩関節鏡技術をマスターし、更に深化していく土壌と責任があります。このように次世代の肩関節外科医は幅広い分野で、多くの活躍が期待されています。もとより浅学非才の身ではございますが、次世代の肩関節外科医の啓発と連携に誠心誠意全力を尽くす所存でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。



---

## 理事 菅谷啓之

このたび日本肩関節学会の理事に就任させて頂きました。皆様には心より御礼を申し上げます。私は1987年千葉大学医学部卒業後、千葉大学関連施設にて初期研修を行う中、肩関節疾患の治療に興味を持ち、1993年の長崎での日本肩関節学会から本学会の会員に加えて頂きました。この間、同門および同門外の諸先輩の皆様のご現在に至るまでのご指導とご交誼、さらに本学会を通して知己を得ることができた後輩を含めた多くの諸先生方のご指導とご交誼のおかげで、肩関節外科医として成長することができたと確信しております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

千葉大学での後期研修を終えてからは、ひたすら肩関節疾患の日常診療に没頭してまいりましたが、自分にとっての大きな転機は1996年の米国への3カ月の短期留学でありました。これ以降、海外にも広く目を向けるようになり、肩関節鏡先進国であった北米や欧州の学会にも積極的に参加して情報収集と自らの臨床の軌道修正を行うと同時に、自分の足りない部分や優っている部分を確認し、自らの臨床データに基づき、多くの学会発表や論文公表を行って参りました。その結果、2002年以降、海外からの講演やライブ手術などに数多く招待されることとなり、現在では年間100日程度も海外出張を重ねております。海外出張では、自分からの情報発信だけでなく、一緒に招待されている世界のトップサーजनと呼ばれる先生方の講演を拝聴できるばかりか、個人的な親交を深めることができる点も自分にとって大きなメリットです。

このような中、我が国の肩関節外科の優れている点と劣っている点をはっきりと見えてきました。

そこで自分の使命として、日本の若手の先生方の優れた研究やコンセプトを海外に情報発信させること、またリバス型人工肩関節など、極端に遅れてしまっていた人工関節分野の臨床と研究レベルを欧米並みに追いつかせることなど、日本の優れているところの情報発信と遅れてしまっている部分の底上げを図るために、理事として日本肩関節学会に恩返しのため身を賭して貢献していく所存です。

---

## 理事 高瀬勝己

この度、一般社団法人日本肩関節学会理事に選出していただきました東京医科大学整形外科の高瀬でございます。2012年より学会代議員に就任し学術委員会および社会保険委員会の委員として活動してまいりました。学術委員会では、2016年に肩鎖関節脱臼におけるアンケート調査を主導させて頂き、現在は結果を精査するとともにJSESへの論文投稿を準備しています。また、社会保険委員会では、2013年に上腕骨近位端骨折の保存治療のアンケート調査を主導し、結果を基に新規処置として上腕骨近位部骨折固定術を策定し外科系保険連合会に提案し処置試案として採用されています。現在、この試案から保険診療報酬収載を目指しているところです。理事就任にあたり、今までに活動してきた学術委員会の担当理事、社会保険委員会のアドバイザーを拝命することになりました。学術委員会では肩鎖関節脱臼のみならず、拘縮肩のアンケート、初回肩関節脱臼における外旋位固定の多施設調査が進行中のテーマです。今後も新たなテーマを検討し、会員の先生方と共有できる考え方を模索できればと考えております。また、社会保険委員会ではアドバイザーの立場ではありますが、臨床で活躍されている会員の先生方に保険診療において正当な評価を得られることを念頭に活動したいと考えております。さらにtraveling fellowの関東地区担当をさせて頂いている関係上、海外の先生方とより多くの会員の先生方に多くのコミュニケーションあるいは討論の場を設けさせて頂き学会のグローバル化に貢献していきたいとも考えております。若輩者ではありますが、今後の日本肩関節学会の発展に少しでも寄与したく考えております。日本肩関節学会会員の皆様、今後よろしくご支援を賜りたくお願い申し上げます。



## 理事 橋口 宏

---

この度、伝統ある日本肩関節学会の理事の末席を務めさせて頂くことになりました。御支援を頂戴致しました先生方の負託にお応えできますよう、可能な限り努力を傾注するよう心掛けて参りたいと存じます。

御存知の通り、高齢化の進展に伴う医療・介護の必要度の増加にも関わらず、政府の財政健全化改革を受け、診療報酬全体はマイナス改定が続いております。技術料にあたる本体部分は微増しておりますが、保険収載されていない医療技術が未だ多数認められることから十分な引き上げとは言えないのが現状です。関節鏡手術における高額な単回使用製品の問題もあります。治療に対する相応の対価を得ることは、適切な医療を行い、医療技術を発展させる上でも最低限の条件であると考えます。

一方で、日本医学会の「COI管理ガイドライン」改定に伴い、日本整形外科学会でも「COIに関する指針」が改正され、2017年9月21日会告として通知されました。さらに、2018年4月1日からは産学連携臨床研究における透明性確保のための臨床研究法が施行されました。医学研究の公正さと社会的責任を果たす観点から本学会でも2016年より倫理・利益相反委員会が設置され、COI指針が策定されております。

社会保険等委員会および倫理・利益相反委員会担当として、医療経済ならびに倫理の両側面から、本学会会員の医療技術の発展と基礎・臨床研究の積極的推進のため、微力ではありますが尽力していく所存です。

今後とも諸先生方からの御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 理事 望月 由

---

この度、伝統ある日本肩関節学会の理事に選出されました望月由です。

1985年に日本肩関節学会に入会させていただき、2009年に幹事に就任、その後プロジェクト委員会と教育研修委員会の委員会活動を行わせて頂き、2014年に理事に選出いただきました。また、2016年には第43回日本肩関節学会を主催させていただきました。この度、さらなる日本肩関節学会の進歩と発展のために理事会の運営・企画に参加させて頂き、精一杯努力したいと考えております。

年々新しい情報が発信され学問的な進歩は日進月歩です。これらの情報を身近にすることは大変重要だと考えます。

そして、日本肩関節学会の歴史を振り返り、現状を正確に把握し、アジアをはじめとした世界に目を向け、さらに世界に向けて情報を発信できるようにすることは極めて重要と考えます。そのためには、まず理事会と委員会ならびに代議員会とが双方向に連携することが肝要であり、広報委員会を担当させていただくことにより、真に会員のためになる事業を行っていきたいと考えています。

広報委員会は、日本肩関節学会が理事長制度となってできた委員会なので比較的新しい委員会です。委員会の主な活動は、日本肩関節学会を広く人に知らせることと、日本肩関節学会員に情報を発信していくことの二つです。このために、日本肩関節学会ホームページを充実するとともに、英語版ホームページも充実させることが大切と考えております。また、会員へのニュースレター作製も重要な活動と考えております。

今後も、日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んでいく所存ですので、宜しくご指導の程お願い申し上げます。

---

## 監事 中川照彦

この度、監事に就任した同愛記念病院副院長の中川照彦と申します。これまで理事を4年間務めて参りましたが、今後は監事として理事会に出席して、理事会を監査しつつ、積極的に意見を述べていきたいと存じます。

6名が新理事に就任し、理事長は池上博泰先生になりました。人事が刷新され日本肩関節学会に新たな息吹が吹き込まれることを期待しています。

担当理事を務めてきた雑誌「肩関節」編集委員会、社会保険等委員会、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループのアドバイザーに就任させていただきました。さらに学術集会検討ワーキンググループの委員にも選んでいただきました。これまでの経験を踏まえて、適切なアドバイスができればと思っています。

個人情報管理、医療倫理の尊重、医療安全対策、学会のコンプライアンスの遵守などが厳格に求められる社会情勢になって参りました。日本肩関節学会もしっかりと基盤をかため、健全な財政のもと、時代に即した学会運営を行っていかねばなりません。

学術面では医療安全や医療倫理などを十分吟味して進んでいかないと思わぬ落とし穴に入ってしまう恐れがあります。だからといって萎縮してしまうと革新的な進歩には繋がりません。学会員の皆様が肩関節外科に対し情熱をもって邁進できるように応援していきたいと思えます。もうすぐ65歳になりますが、手術好きは相変わらずで、肩の鏡視下手術を週3件程度行っています。共に頑張っていきましょう。よろしくお願い申し上げます。

---

## 監事 中川泰彰

2018年10月18日の社員総会で、日本肩関節学会の監事に推薦、承認され、今後2年間監事を仰せつかりました中川泰彰です。

私が日本肩関節学会に入会したのは、確か1990年です。初めて肩学会に参加し、若手が自由に議論、発言し、活発な学会だなあと感嘆いたしました。それから、肩関節の魅力に取りつかれて、1996年に京都大学に帰学してからは、最近まで毎年肩関節学会に演題を応募し続けてきました。ただし、脱臼、腱板などの主疾患では、症例数で他施設と肩を並べることができないため、変形性肩関節症などの角度を変えた演題が中心でした。

また、学会活動としては、2004年に幹事に立候補するも、2/3の推薦が得られず落選し、2008年に再度立候補し、幹事に就任することができました。その後、高岸直人賞決定委員会、一般社団法人へ移行するための定款等検討委員会などを經由し、最近までは定款等運用委員会委員長として、活動させていただいておりました。今回、監事を仰せつかりましたが、監事は理事と違い、新しいことを提案するのではなく、理事や代議員、会員が行おうとすることが、間違いではないことをチェックする役割と考えています。上記のごとく、今までいろいろな出来事に遭遇してまいりました。これらの経験を今後2年間の監事の役割に活かしていけたらと存じます。理事、代議員、一般会員の皆様方、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## ▶ 新代議員就任あいさつ

### 代議員 新井隆三

京都大学整形外科の新井隆三と申します。このたび、日本肩関節学会代議員に選出していただきましたのでご挨拶申し上げます。

私は1999年に京都大学医学部医学科を卒業し整形外科医としての研修をスタートしました。地方の病院で高齢者の骨折への対応に追われていた頃、他院へ出張手術に来られた船橋整形外科の菅谷啓之先生にお会いする機会がありました。そこで当時は神業のように思えた鏡視下手術を目の当たりにし、さらにそのあと機能診断の重要性を説かれたご講演を拝聴して、大きく心を揺さぶられたことを昨日のこのように思い出します。

2006年から2年間船橋整形外科で研修をさせていただくとともに日本肩関節学会に入会させていただきました。またこの間に東京医科歯科大学臨床解剖学教室秋田恵一先生のもとでたいへん説得力のある精緻な臨床解剖学に触れさせていただきました。2008年からは京都大学整形外科に帰学し、研修や日々の臨床で感じた疑問を主に解剖組織学的手法で明らかにしようと努力してきました。

日本肩関節学会は、今日に至るまで未熟な私を受け入れ、指導し、また親切に励ましてくださった大事な諸先生方や友人が集うコミュニティだと考えています。経験豊富な先生から含蓄に富んだご意見をいただける一方、これから専門性を深めようとする若手も物怖じしなくてよい自由さがあります。この素晴らしい伝統を持つ日本肩関節学会が、社会から期待される責任を果たしつつさらに発展できるよう、微力ながら努力してまいりたいと思います。なにぶん若輩者ではありますが、今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

### 代議員 菊川憲志

この度、日本肩関節学会代議員に選出して頂きました熊本総合病院の菊川憲志と申します。私は1995年に大分医科大学を卒業し、1998年熊本大学大学院に進学したことを契機に、井手淳二先生の勧めにて熊本肩関節研究会、国際学会に参加するようになり、肩関節外科に興味を持ちました。卒業後は森澤佳三先生、平野真子先生のもとで肩関節の勉強を行い、また北海道大学末永直樹先生よりシドニー大学 David Sonnabend 先生を御紹介頂き、留学する機会も頂きました。その後、熊本大学井手淳二先生のもとで2年間研鑽をつみ、2010年より八代総合病院（現：熊本総合病院）に勤務、2014年より部長職・診療部長職を拝し、肩関節を中心に日常診療に当たっています。多くの先生方に出会い導いて頂いたことに感謝申し上げる次第です。

日本肩関節学会には2001年に入会し、基本的に楽しみながら、発表時は緊張感を持って参加させて頂きました。日本肩関節学会は発表内容、論文の質などレベルの高い学会です。それはこれまで道を作って下さった諸先輩方の努力の賜物であります。先人たちの築き上げた歴史と伝統を継承しつつ、新しいことへもチャレンジする精神を持って臨んで参ります。微力ではありますが、日本肩関節学会の発展に尽力したいと思っております。若輩者ではありますが、御指導の程何とぞよろしくお願い申し上げます。





---

## 代議員 黒川大介

このたび、日本肩関節学会の代議員を拝命しました地域医療機能推進機構（JCHO）仙台病院の黒川大介と申します。御推挙いただいた先生方には深く御礼申し上げます。

私は2005年に東北大学医学部を卒業し、東北大学整形外科に入局した2007年に日本肩関節学会に入会いたしました。入局と同時に日本肩関節学会に入会した理由は、医学部生時に肩関節に興味を持ったことにあります。医学部生時に東北福祉大学の硬式野球部の学生トレーナーとして活動し、後にプロ野球へと進む選手を含むハイレベルな野球選手にかかわる機会を得ました。当時は、Frank Jobe先生の著書を何度も読みましたが、本には書かれていない世界がスポーツの現場にありました。肩関節に関する疑問を抱き、肩関節に惹かれていく一方で目の前の選手の力になれない現実に直面し、将来は投球障害を治したいと考え整形外科医を志しました。これまで、学生時代に熊谷純先生のお口添えで信原病院に見学に向い、入局後は井樋栄二先生、佐野博高先生、山本宣幸先生に学術分野をご指導頂き、佐藤克巳先生、田中稔先生に臨床を学ぶなど、恵まれた環境で研鑽を積ませていただきました。また、徳島での野球肘検診に感化され、宮城県でも野球検診を開始し、「投球障害の発生予防」や「長くスポーツが続けられるからだづくり」も検診の目的の一つとして活動し、現在では年間に小学生1,300人以上、中高生500人以上の野球選手が参加するまで広がりました。

今後は歴史ある日本肩関節学会の代議員として、スポーツ現場と肩関節外科医としての経験を生かして、肩関節疾患・スポーツ障害の病態解明、治療が更に発展するために尽力したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

---

## 代議員 酒井忠博

この度、日本肩関節学会代議員に選出して頂きました酒井忠博と申します。

1992年名古屋大学卒業後、名古屋大学大学院にて軟骨代謝の研究を行った後、2000年よりカナダのモントリオールにて関節軟骨に関する基礎研究を行い、2004年に名古屋大学整形外科に帰局し、2006年より2017年まで膝肩スポーツ班をチーフとして指導させて頂きました。

研修医時代にJリーグ名古屋グランパスのチーム立ち上げに関わり、膝を中心とした関節鏡手術を指導して頂き、大学に戻ってからは肩、膝、スポーツの分野の全てを担当して参りました。中でもとにかく肩関節の魅力に取り付かれ、東海地区では大学の先輩である岩堀裕介先生、中学校の先輩である杉本勝正先生、また名神肩関節鏡ミーティングの世話人を通じていつもご指導を頂いております林田賢治先生の背中を追いかけて参りました。

2013年より雑誌「肩関節」の査読員を拝命しており、2016年にはカルガリー大学のDr. Ian Loの元で2ヶ月間Visiting Medical Learnerとして肩関節鏡手術についてご指導を頂き、2017年には菅谷啓之先生のご助力にて日本韓国肩関節学会交換留学生に選抜して頂いて韓国の肩関節外科事情を勉強させて頂きました。

2017年7月よりトヨタ記念病院整形外科に赴任し、肩関節外科のみならずトヨタ自動車を中心とした関連企業に所属するスポーツチームのケアも行なっております。

名古屋大学関連における肩関節分野はまだまだ発展途上であり、何とかこの先もこの分野の若手を引き続き教育してレベルを上げていくことに尽力し、肩関節学会に貢献できるように頑張っていきたいと考えております。

何分にも微力ではございますが、全力を挙げて精励する所存でございますので、何卒ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



---

## 代議員 谷口 昇

この度、日本肩関節学会代議員に就任致しましたので紙面を借りてご挨拶させていただきます。私は米国留学を終えて帰国した2011年より、自分のサブスペシャリティを肩関節外科に求め、日本肩関節学会次次期会長の末永直樹先生の下で2年間フェローとして学んだ後、宮崎大学医学部整形外科を実践の場として研鑽に努めて参りました。これまで広範囲腱板断裂や腱板断裂性関節症に対して、小径骨頭を用いた人工骨頭置換術+腱板修復術や、リバーstype人工肩関節置換術などの臨床経験を日本肩関節学会などで毎年発表し、自らの治療選択の妥当性について反省点も含めて検証して参りました。また、新規治療法の開発として、鏡視下 Surface-holding 法や骨髄刺激法による生物学的治癒を目的とした腱板修復術について、JSES に筆頭著者として発表した他、最近では腱板修復術とリバーstype人工肩関節置換術の手術適応を決定する因子について新たな指標を開発し、JSES 含む2編の英文論文に筆頭著者として発表致しました。基礎研究の分野に関しても、間葉系幹細胞における脂肪分化を制御するクロマチン蛋白に注目して、腱板断裂後の筋内脂肪浸潤のメカニズムについて明らかにし、その成果を責任著者として最近 Scientific Report に発表しました。日常診療での疑問点を科学的に証明することにより、肩関節疾患の病因・病態を明らかにして、最もリーズナブルかつ straight forward な治療法の選択と新規治療法の開発に努めていきたいと考えています。今後は、鹿児島大学整形外科の若い力も結集しながら、臨床、研究ともに日本肩関節学会の発展に尽力していく所存です。日本肩関節学会会員の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

---

## 代議員 二村昭元

この度、日本肩関節学会代議員の任を拝命しました、東京医科歯科大学の二村昭元と申します。私は東京医科歯科大学在学中に、ラグビー競技において肩関節を脱臼したことをきっかけに肩関節外科医の道を目指し、同大学の整形外科に入局しました。大学院を卒業後に、上肢グループの専門研修のために、同愛記念病院の中川照彦先生を中心に指導いただきました。2010年より、ひょんなことから秋田恵一教授のもと、同大学臨床解剖学教室に席を置くこととなり、臨床と研究、二足の草鞋を履くこととなりました。当時は肩関節に関する研究テーマが中心でしたが、上肢・下肢・体幹と部位の垣根なく、大学院生と共に全身の骨関節形態に関する疑問に対する研究に没頭するうちに、2016年よりJA 共済総合研究所のお力添えで、運動器機能形態学講座という寄付講座を開設することができました。現在では、肩以外の関節や、ヒトの基本構造・原則を理解した上で、改めて肩関節の構造に対して、何が提言できるのかを日々模索しております。

研鑽としては、中川照彦先生をはじめ、船橋整形の菅谷啓之先生、フランスはリヨンの Gilles Walch 先生にも短期間ではありますが、ご指導いただきました。教わったことを解釈し、自分自身の中にある関節の形態学から得た知見をふまえて、詳細なMRI・超音波を用いた画像解析、関節鏡により可視化される微細構造など情報量の波にのまれてしまいそうな、若い世代の肩外科医と協力して、まだまだわからない「肩の痛み」に対峙していければと考えています。

微力ではありますが、歴史ある日本肩関節学会に裨益できるよう努力させていただきたいと思っております。今後ともよろしく願い申し上げます。



代議員 松浦恒明

---

この度、代議員に選出いただきました松浦恒明です。

福岡県久留米市に生まれ、中学以降は博多で育ち、修猷館高校、華の浪人時代、九州大学医学部を経て、現在は北九州市の済生会八幡総合病院に勤務しています。

あまたのご指導を賜りながら、先輩、同僚、後輩医師、さらに理学療法士、看護師、トレーナーなど多くの医療従事者の方々と共にこの地で少しずつ肩の研鑽に努め、より良き医療を患者へ提供しようと努力してまいりました。患者さんこそが教科書であり、病棟は患者さんを治療すると同時に、研究させていただく場所であるとの教えを心に刻み、パソコンばかりを見て、患者を診て触れて語ることを忘れた医師にはなるまいぞ、と全人的に患者を診るよう心掛けてまいりましたが、いまだ気宇広大なる先達に遠く及ばず試行錯誤の毎日であります。

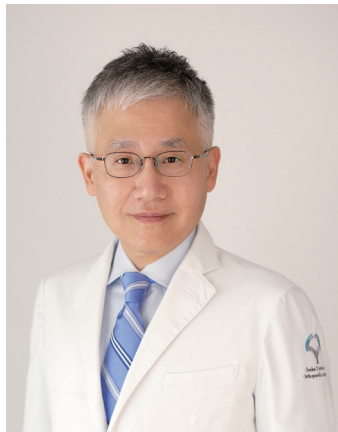
行く道には必ず不安や恐怖があり、これに打ち勝つ勇気がなければ前には進めず、さりとして一歩ひいて冷静に俯瞰するのもまた勇気であり、医は仁ならざるの術、努めて仁をなさんと欲す、という戒めを胸に、Being goodとGetting betterの狭間で揺れ動きつつ、私の中での医療を一步でも推し進めるべく、牛の如く歩んでおります。

私は、今日まで日本肩関節学会にてご指導賜り育てていただきました。その教えを糧に、北九州地域の肩関節医療の向上に微力なりとも貢献しなければと考えております。そして、ひいては日本、世界の肩関節医療の発展に多少なりとも貢献できるように日々精進していかなければならないと思っております。

なおこの度、日本肩関節学会の広報委員会委員、選挙管理委員会委員、手術手技認定のあり方ワーキンググループ委員を拝受いたしました。未熟者ではありますがこのような覚悟にて務めを果たしていく所存であります。なにとぞよろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

## ▶ 第45回日本肩関節学会を終えて

第45回日本肩関節学会学術集会 会長 菅本一臣（大阪大学運動器バイオマテリアル寄附講座）



このたび第45回日本肩関節学会を2018年10月19日・20日の両日に大阪国際会議場にて主催させていただきました。当日は好天に恵まれた結果、2,000名近くの参加者があり大成功に会を終えることができました。

本学会のテーマは「肩関節を議論する discuss the shoulder」でしたが、日本肩関節学会では遠藤寿男先生の loose shoulder や信原克哉先生の rotator interval lesion など独自性のある研究を様々に輩出してきたという輝かしい歴史があります。そのたいまつを火を後に続く先生方に渡していくためにも、本学会を成果あるものにしたいと思い、そのためにできるだけ多くの先生方には今回の学会のテーマにあるように、許される限りの時間をかけて肩関節を十分に議論することに努めました。そのために全演題を口頭での発表とし、ポスター発表は無しといたし

ました。

また新しい？試みとして昔は広く行われていた「宿題報告」を提案させていただいておりましたが、2テーマに関して1年間の準備期間をもって十分な検討を行っていただいた成果を本学会にて報告してもらいましたが、大変内容のある発表が多く見られました。

これも今回の新しい試みでしたが「なにわ賞」（最優秀発表演題賞）を設けました。これは年齢制限なく、本学会で最も素晴らしい発表を行った方に対して賞（賞金付き）を与えるものです。それに対して石谷栄一先生（福岡志恩病院 整形外科）が見事選出されました。

一方では、海外からの招待者は欧米およびアジアからの重鎮というよりはこれからを担う中堅の先生方を多くお招きいたしました。その方々が将来日本肩関節学会との国際交流のキーマンとなってもらえるように期待して招待いたしました。

会長講演では僭越でしたが「形や動きから見る肩関節の不思議」というタイトルで、私の20年以上をかけた知見を紹介させていただきました。

本学会は学術集会としての使命も果たせましたが、一方では会員の親睦を図ることも重要と考えました。全員懇親会ではテレビ大阪の全面協力を得て「たこ焼きレインボー」の女の子たちのコンサートを含め楽しい会とすることができました。

最後に、以上の様々な活動は参加いただいた会員の皆様方のご協力があったことであり、この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。



## ▶ 第46回日本肩関節学会会長あいさつ

第46回日本肩関節学会学術集会 会長 畑 幸彦 (JA長野厚生連 北アルプス医療センターあづみ病院 院長)



この度、2019年10月25日(金)、26日(土)に第46回日本肩関節学会・学術集會を長野市にありますホテル国際21とTHE SAIHOKUKAN HOTELにおいて開催させていただくことになりました。このような歴史と伝統のある本学会を長野県で初めて(中部地区では25年ぶり2回目)主催させていただくことになり、大変光栄に存じております。

日本肩関節学会は、肩に関して世界で最も歴史のある学会です。これは、様々な試行錯誤の中、先人の努力とそれを発展させるべく行っている私たちの研究結果が培ってきた歴史です。日本肩関節学会は、その専門性の高さや討議の深さでは日本でも有数の学会であり、世界にも誇れるクオリティーの高い演題を常に連ね続けてきました。先人の真摯な態度に打たれた若い肩関節外科を目指す医師が徐々に増え、現在の学会会員数と学会の規模を支えてきました。

今回の学術集會は「継往開来(けいおうかいらい)」をテーマにさせていただきました。「継往開来」とは、先人の事業を受け継ぎ、発展させながら未来を切り開くという意味です。具体的には「先人たちの創意工夫と考え方の伝承」「病態の解明を目的とした研究」「日本独自の治療体系の確立」「肩関節外科以外の他分野のエキスパートからの学び」という4つの項目が、私たちが2019年の学術集會に向けて考えているコンセプトです。これらすべてを一つの学術集會に盛り込むことは困難であることは理解していますが、可能な限り、この方向性の中で学会を運営していきたいと考えています。これから鋭意、プログラム内容を実りあるものに練り上げて参りますので、会員の皆様の多くのご参加をお待ちしております。

信州長野には都会のような利便さはありませんが、その分、豊かな自然に囲まれた信州ならではの“おもてなしの心”を持って、本学術集會を運営していきたいと考えています。10月の信州は紅葉が素晴らしく、新そばがおいしい季節です。ぜひ皆様でお越しいただき、学術集會で活発な討論をしていただいた後は、秋の「さわやか信州」をお楽しみください。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## ▶ 第47・48回日本肩関節学会学術集會のお知らせ

### 第47回日本肩関節学会

学術集會会長：末永直樹(整形外科北新病院上肢人工関節・内視鏡センター)

開催日：2020年10月9日(金)～10日(土)(予定)

開催場所：ホテルエミシア札幌(北海道札幌市)

### 第48回日本肩関節学会

学術集會会長：岩堀裕介(愛知医科大学整形外科学教室)

開催日：2021年10月(予定)

開催場所：愛知県名古屋市

## ▶ 各委員会報告

### 雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 佐野博高

編集委員会では、これまで担当理事として当委員会を主導してこられた中川照彦先生が任期終了に伴って退任され、替わって今井晋二先生が担当理事にご就任くださることになりました。今後は今井晋二新担当理事のご指導の下、佐野博高（委員長）、内山善康副委員長、鈴木一秀副委員長という体制で、26名の委員の先生方とともに本誌の編集業務に当たってまいります。ご投稿いただいた論文がより良いものになるよう、そして会員の皆様の貴重な業績を遅滞なく世に出していけるよう全員で努力してまいりますので、ご協力よろしくお願いたします。

2018年10月18日には対面での会議を開催し、投稿規定の見直し等について討議しました。懸案だった経過観察期間については「臨床研究は原則として1年以上の経過観察期間とします。ただし、骨折治癒や新しい手術法の術後短期成績、術中合併症に関する報告などについては、1年未満の経過観察であっても編集委員会の判断で掲載を認めることがあります。その場合は、論文中で経過観察期間が1年未満にとどまった理由、問題点などを十分考察してください。」という記載に改めました。また、投稿締め切り日に関する記載について、「学会終了日の翌日から起算して45日後」と明確化しました。さらに、投稿論文の目次分類表についても、時代に合わせて改訂を検討していくことになりました。

会員の皆様におかれましては、本誌に投稿される際は日本肩関節学会のwebsiteに掲載されている最新の投稿規定 (<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>) をご確認くださいませよう、お願いいたします。

今後は2019年秋の第43巻刊行に向けて、査読・編集作業を進めていく予定です。もし本誌に関してご質問・ご意見等がございましたら、事務局までメールでお問合せいただければ幸いです。

### 国際委員会

担当理事 菅谷啓之

国際委員会は、2018年10月の理事改選に伴い、菅本一臣先生に代わり菅谷啓之が担当理事に、三幡輝久先生が委員長に就任されました。従来からの委員の乾浩明先生、船越忠直先生、望月智之先生に加えまして、新委員として、瓜田淳先生、谷口昇先生、松村昇先生、さらに理事を退任されました井樋栄二先生に委員として加わって頂き、総勢9名をメンバーとして活動しております。

当委員会の主な業務は、ASESトラベリングフェローの選考と派遣、SECECおよびKSESトラベリングフェローの選考・派遣に加え、ヨーロッパと韓国からのトラベリングフェローの受け入れスケジュール作成にあります。先の委員会にて、トラベリングフェロー選考時期の前倒しが決定いたしました。すなわち、2020年秋に派遣するASES、SECECトラベリングフェローの選考については、募集を2019年の日本整形外科学会学術総会（JOA）後（従来2020年1月）、SECEC選考は2019年10月の日本肩関節学会学術集会時（従来は2020年のJOA時）、ASES選考は2020年の日本整形外科学会総会時（従来通り）に行うこととなりました。また、2019年春に派遣するKSESのトラベリングフェローとして、昭和大学藤が丘病院の西中直也先生と千葉大学の落合信靖先生が選考されました。

上記のように2020年秋に派遣するASES、SECECトラベリングフェローの募集を2019年JOA後に開始しますので、皆様奮ってご応募下さい。また、国際委員会では、個人的な長期海外留学の門戸を常に



開いて幹旋のお手伝いをいたしますので、海外留学に興味のある学会員は遠慮なく国際委員会メンバーにお声掛けください。今後とも国際委員会メンバー一同、日本肩関節学会員の国際化に向けて鋭意努力してまいりますので皆様宜しくお願い申し上げます。

## 高岸直人賞決定委員会

担当理事 伊崎輝昌

当委員会の委員・担当理事を歴任された井手淳二先生が昨年8月にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。当委員会は、役員改選に伴って委員構成が変わり、委員長に船越忠直先生が就任されました。委員は地域偏在がないよう配慮し就任いただいております。また、お二人の経験豊富な名誉会員をアドバイザーに迎え、高岸直人賞、Best Abstract16の選考や今後あり方についても検討していきたいと考えております。

2018年10月18日開催の委員会において、第45回日本肩関節学会学術集会以採択され選考基準を満たした演題の代議員査読評価の集計結果を検討し、高岸直人賞候補演題を決定しました。今後、対象者に論文提出を求め、委員会審議を経て第32回高岸直人賞（基礎論文、臨床論文各1編）を決定します。受賞者は、第46回日本肩関節学会学術集会以表彰されます。また、第45回日本肩関節学会学術集会以採択された演題の代議員査読評価の集計を検討し、Best Abstract16の選考を行いました。対象抄録は、Journal of Shoulder and Elbow Surgeryに掲載される予定です。

### 委員会構成

担当理事：伊崎輝昌

委員長：船越忠直

委員：青木光広 北村歳男 後藤英之 佐野博高 末永直樹（次期会長）

菅本一臣（前会長） 中川滋人 夏 恒治 畑 幸彦（現会長）

アドバイザー：高岸憲二 玉井和哉

## 社会保険等委員会報告

担当理事 橋口 宏

本年度より中川照彦先生から担当理事を引き継ぎました。本委員会の構成も委員長に望月智之先生が就任され、委員としては岡村健司先生、菊川和彦先生、杉本勝正先生、鈴木一秀先生、名越充先生に加え、新たに菊川憲志先生、黒川大介先生が就任され8名となりました。前担当理事の中川照彦先生と前委員の高瀬勝己先生には引き続き外科系学会社会保険委員会連合（外保連）関連の業務を含めアドバイザーとしてお力添えを戴けることになりました。

会員の先生方にご協力を戴きました2017年手術アンケートは、現在委員会において処理・解析を行っております。今回は肩関節外科における手術件数のみならず、従前の複合手術や合併症に加えてリバーズ型人工肩関節も追加したため、膨大なデータ量となっております。集計作業と解析が終わり次第、雑誌「肩関節」ならびにホームページ上で公開する予定です。

早速、2017年手術アンケート結果の一部を診療報酬改定に向けた資料として活用させて頂きました。2020年外保連試案に上腕二頭筋長頭腱損傷に対する「腱固定術」を収載要望致しました。観血的および鏡視下手術に加え、腱板断裂との複合手術も要望しております。外保連試案への収載が決まれば、厚労省ヒア



リングに向け鋭意準備を進めていく予定であります。

実態調査である手術アンケートは外保連や中医協に対して新たな手術手技の申請・要望を行う上で、大変重要な資料となります。次回の手術アンケートは2022年に行う予定です。その際には会員の先生方のご協力をお願い致します。

保険点数未収載の処置や手術、さらには関節鏡手術における単回使用製品の問題など、社会保険関連の問題は多く山積みされております。本委員会としては、こうした問題点を是正すべく、今後も実態調査を行いながら改正や改善の要望を行っていく予定です。

## 教育研修委員会

委員長 後藤英之

今年度の教育研修委員会の活動について報告致します。

まず、第10回教育研修会を以下のように開催しました。早朝開催にも関わらず多くの皆様のご参加を賜り誠にありがとうございました。

2018年10月20日（第45回日本肩関節学会開催期間中）

座長：北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター長 末永直樹先生

講演1：肩の機能解剖・バイオメカニクス

演者：至学館大学健康科学部健康スポーツ科学科 後藤英之先生

講演2：肩の診察、画像診断

演者：北新病院 上肢人工関節・内視鏡副センター長 大泉尚美先生

講演3：肩関節不安定症の診断と治療

演者：東海大学整形外科 准教授 内山善康先生

講演4：腱板断裂（cuff tear arthropathy 含む）の診断と治療

演者：慶友整形外科病院 整形外科部長・慶友関節鏡センター長  
船越忠直先生

また、キャダバーワークショップを10月26日（金）、27日（土）の2日間、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催しました。

参加人数は関節鏡コース4名、切開手術人工関節コース9名の合計13名でした。今回は、初めての試みとして関節鏡や人工関節を用いての実際の手術手技の実習を行いました。また、10月26日（金）夕方に第3回肩関節疾患手術手技フォーラムを名古屋市立大学会議室（JPタワー名古屋5階）にて開催しました。本会開催に際しては、運営事務局のメリ・ジャパンをはじめ関係各位の皆様の多大なご協力、協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。参加者からは、有意義であったとご好評いただいた反面、器具の不備や、機器の不備などの指摘を受けました。次回開催までにはそれらを改善し、より有意義なワークショップとなるよう準備したいと思っております。教育研修委員会としては、研修会やワークショップを通じて会員の皆様の日々の診療のお役に立てるよう活動して参りますので、今後ともご指導、ご意見を頂けますようお願い致します。





## 学術委員会

委員長 森澤 豊

学術委員会は、高瀬勝己委員が担当理事に就任され、理事の任期終了に伴い畑幸彦先生が委員会に残って下さいました。柏木健児先生が退任され、新たに乾浩明、塩崎浩之の両先生をお迎えし、ほかに後藤昌史、小林勉、田中栄、林田賢治、浜田純一郎、藤井康成、森原徹、山本宣幸の先生方から構成されています。委員長は森澤豊です。

活動内容は、以下の通りです。凍結肩の会員へのアンケート調査結果について、浜田純一郎委員が中心となり作成した論文 Representative Survey of Frozen Shoulder Questionnaire Responses from the Japan Shoulder Society: What are the Appropriate Diagnostic Terms for Primary Idiopathic Frozen Shoulder, Stiff Shoulder or Frozen Shoulder? の Journal of Orthopaedic Science への掲載が決まりました。

肩鎖関節脱臼の調査につきまして高瀬勝己理事が主となり、肩鎖関節脱臼の検査方法、分類、治療方法についてのアンケート調査結果を解析し論文作成へと進めています。

これらアンケートは臨床の現場で活躍している先生方を対象としており、肩関節診療の実際について報告できるように考えています。

初回脱臼に対する肩関節外旋位固定の前向き調査については、山本宣幸委員を中心にプロトコールを作成しました。データベースセンターとしてUMINに依頼をしています。今後は無作為化の画面を作成し、協力病院を中心に全国的な調査を始める予定です。関係各位のご協力に感謝申し上げます。

## 広報委員会

委員長 北村歳男

広報委員会の活動は日本肩学会の最新の情報や委員会活動などを会員および一般の皆様にお知らせすることにあります。日本肩関節学会ホームページ上にニュースレターとして年に2回発行し、今回は11号になります。

これまでも多くの会員の皆様に読んでいただけるよう取り組んできましたが、2018年より学術集会期間中の会員連絡会がなくなりましたので、それに代わる情報媒体としてのニュースレターの重要性が増しました。一層のニュースレターの利用率を向上させる必要が生じました。しかしながらこれまでニュースレター利用頻度が全く不明だったので、重要お知らせや学会活動がどの程度会員に伝達できているか調査する必要があり、2018年は利用率のアンケート調査を行いました。アンケート実施期間は2018年6月20日より7月8日であり、日本肩関節学会会員1,681名に対し、ニュースレター9号を読みましたか？HP内のどこにあるか知っていますか？の2つの簡単な質問を行いました。回答総数は128名(7.6%)で、ニュースレターの利用頻度57.7%が利用、HP内のどこにあるかがわからない44.1%でした。これまで利用率は全く不明の状態でしたので、貴重なデータを得たものと思います。

この結果を踏まえ、委員会内にプロジェクトチームを作り、解析と改善案を検討いたしました。今後もニュースレターの利用しやすい環境整備と読み易い内容を少しずつ改善しながら発行していきたいと考えています。

今年度の委員会構成は新しく3人が加わり、担当理事は望月由、委員は新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、北村歳男(委員長)、国分毅、小林勉、夏恒治、西中直也(新)、松浦恒明(新)、村成幸(新)(五十音順、(新):新委員、敬称略)で活発な意見を出ながら委員会活動をしています。皆様からも載せたい記事があれば、学会事務局に連絡いただければ幸いです。宜しく願い申し上げます。

## 財務委員会

委員長 林田賢治

2018年度の財務委員会の活動報告をさせていただきます。

最初に、2018年度予算作成にあたり、ご協力いただいた各委員会の先生方に深謝いたします。

2017年度決算報告では、黒字収支で終わることができました。昨年に続き黒字決算を報告することができ安堵しています。従来の赤字決算を理由に生じていた年会費の引き上げ問題はしばらく棚上げできる状況です。

一方2018年度予算では赤字を計上しています。これは、肩の運動機能研究会への支援金と税理士交代にかかる一時的な費用増加等によるもので、2019年度は解消すると予想しています。また、学術委員会の企画による肩関節前方脱臼の外旋装具による保存的治療の多施設前向き研究に予算を計上しています。今後このような肩関節学会主導の学術企画には積極的に予算をつけるようにしていきたいと考えています。

来年度の取り組みとして、収入の面では引き続き過年度会費の徴収を効率よく行うこと、賛助会員の新入会や口数の増加に取り組むことを挙げています。支出の面では各委員会開催する際に、コスト意識を持っていただき、できるだけWeb会議を利用していただくよう働き掛けていきたいと思っております。特に日本整形外科学会学術集会開催時の対面式の会議は原則、Web会議を利用していただくようお願いして行く予定です。できるだけ代替手段のある支出は削減し、余剰金を有効利用できるように努めたいと思っております。

会員の先生方におかれましては本学会の現状をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## 倫理・利益相反委員会報告

担当理事 橋口 宏

本年度より菅本一臣先生から担当理事を引き継ぎました。前担当理事の菅本一臣先生には引き続き委員としてお力添えを戴けることになりました。委員会の構成は、委員長に名越充先生が就任され、委員としては菅本一臣先生、石田康行先生、伊藤陽一先生、後藤英之先生、二村昭元先生に加え、新たに水野直子先生が委員に就任されました。また、公認会計士の柄澤徹先生が外部アドバイザー就任をご快諾戴き、倫理・利益相反委員会としての体制も整った次第です。

利益相反自己申告書の体裁が学術集会、学会役員、雑誌「肩関節」で異なっておりましたが、本委員会からの要望を受け、雑誌「肩関節」編集委員会で審議・承認されたことにより、利益相反自己申告書が全て同一のものが用いられることになりました。学会員の先生方に報告させていただきます。

健常者に対する研究、薬剤・インプラントの適応外使用など十分な倫理審査が必要にもかかわらず、それが実施されていない研究が散見されます。倫理委員会がない施設の先生や倫理面で疑問がある場合には、本委員会にご相談くだされば審議させていただきます。

産学連携臨床研究における透明性確保のための2018年4月1日に臨床研究法が施行されました。臨床研究における適正実施の重要性が示されており、厚労省ホームページでの閲覧も可能です。臨床研究の積極的推進と社会的責任を果たすための研究・開発の公正さを確保するという観点で、今後も適宜COI指針の改正を行っていく予定です。学会員の先生方も産学連携の臨床研究を開始される際にはCOIを念頭に置いた取り組みを行うようお願い申し上げます。



## 定款等運用委員会

前委員長 中川泰彰 担当理事 伊崎輝昌

前委員長 中川泰彰：

前回のニュースレターから当委員会は10月18日に委員会が開催されましたので、2018年10月18日まで定款等運用委員会の委員長であった中川泰彰がその報告をさせていただきます。

報告事項：

1. 「役員選出規則の改正」を審議する予定であったが、選挙管理委員会から変更案が提出されていないため次回に持ち越すことになった。
2. 「功労会員について」を審議する予定であったが、理事会から変更案が提出されていないため次回に持ち越すことになった。

審議事項：

1. 代議員選出規則の改正。第2条を「この法人に、選挙年の4月1日現在の正会員の2%以上4%以内の代議員を置く。」と下線部分を追記することになった。
2. 代議員の6年目の評価について

この項目はとりあえず、定款等運用委員会で審議し、たたき台として、理事会に提出することになった。法人化したのは、2014年8月1日であり、その時から6年を計算するので、評価基準の6年は、2014年8月1日から2020年7月31日までである。学会活動については事務局でチェックする。学術活動については、再任希望の代議員に書類を提出してもらい、具体的には、2020年5月に事務局から再任の意思を確認し、再任希望の代議員に必要な書類を提出してもらい、理事会でそれらを確認し、条件を満たしているかチェックする。満たしている場合、代議員再任となる。この手順が、当委員会で承認された。

担当理事 伊崎輝昌：

学会にとって根幹をなす定款をはじめとした各種規則等を整備し、正しく運用できる状態にすることは、当委員会の重要な責務と考えております。当委員会は、役員改選に伴って委員構成が変わり、委員長に西中直也先生が就任されました。定款や各種規則のさまざまな変更、更新をシームレスに行って参ります。そのために、長く委員長の任を担っていただいた中川泰彰にアドバイザーに就任いただきました。また、本学会定款制定時から助言をいただいていた柄澤徹先生に外部アドバイザーとして就任いただきました。柄澤先生には公認会計士、税理士の立場からご意見をいただきます。会員の皆様におかれましては、疑問点や問題点、ご要望がありましたら学会事務局にご連絡いただけたら幸いです。

委員会構成

担当理事：伊崎輝昌

委員長：西中直也

委員：柴田陽三 林田賢治 松村 昇 橋本 卓 森澤 豊

アドバイザー：中川泰彰

外部アドバイザー：柄澤 徹

## リバーズ型人工肩関節運用委員会

担当理事 菅谷啓之

---

リバーズ型人工肩関節運用委員会は、2018年10月の理事改選に伴い、菅谷啓之が担当理事に、委員長が山門浩太郎先生となりました。井樋栄二先生には引き続きメンバーとして残って頂き、小林尚史先生、松村昇先生、水野直子先生に加えて、新委員として落合信靖先生、木村明彦先生、最上敦彦先生の3名に加わって頂きました。また、高岸憲二先生には引き続きアドバイザーをお願いし、さらに人工関節学会との関係の深い中川泰彰先生にもアドバイザーとしてご指導いただくことになりました。

さて、2017年2月16日の日本整形外科学会理事会で、より実用的になった改訂版リバーズ型人工肩関節(RSA)ガイドラインが承認され発効されましたが、この改訂版ガイドラインも発効後5年となる2019年3月末をもって終了します。2019年4月新ガイドラインとなりますが、今回の改定では、骨折専門医でもリバーズが使用できるように講習受講者の受講資格を肩専門医と骨折専門医の二本立てとした上で、ガイドライン本体の内容も一部改変する予定です。

また、2014年4月にRSAが導入されてから2018年3月までの4年間の販売実数は5,838件であり、JAR(Japan Arthroplasty Registry)における登録数は3,851件(登録率66%)となっております。この登録率は過去数年60%台を推移しており改善傾向がみられません。そこで、当委員会では各メーカーの担当者に手術の立ち会いの際にJAR登録用紙を手術室に持ち込み主治医に渡して頂くよう取り決め、10月の肩学会後より実施しております。北欧やオセアニア並みの登録率100%を目指しておりますので、学会員の皆様におかれましてはJAR登録率向上に是非ともご協力頂くようお願い申し上げます。登録方法が不明の場合は、JSRA(日本人工関節学会)のホームページに上でJARに関してご確認ください。また、手術適応などで悩ましい症例などございましたら、事務局あるいは委員会メンバーにお問い合わせください。

## 選挙管理委員会

委員長 森原 徹

---

役員選出規則と代議員選出規則の改定による選挙の利便性と公平性の確保について下記のように決定した。現行規則では、投票で信任を得た後に選任投票を行う必要があり煩雑である。信任の必要条件を担保しつつ、1回の投票で理事・代議員選任が可能な方法に変更する。

役員(理事)選出規則:

●現行

第8条当選人の決定

信任を得たものが10名を上回る場合は、その信任を得た立候補者に対してあらかじめ募集員数分の連記方式で選挙し、獲得投票数の多い順に選任する。

●改定案

第8条当選人の決定

理事は、社員総会において、総社員の議決権の3分の2を有する社員が出席し、出席した社員の議決権の過半数をもって信任する。信認されたものが10名を上回る場合は、獲得投票数の多い順に選任する。

【改定案のポイント】

理事選任は、本会定款や役員選出規則に定めがないため、過半数出席・過半数賛成で成立する。改定案

では信任の必要条件を担保しつつ、1回の投票で理事選任が可能となる。

代議員選出規則：

●現行

第6条選挙方法

3. 第2項の期間中に、正会員数の3分の1以上の異議の申出がなかった候補者について社員総会で信任投票を行い、3分の2以上の信任を得られたものを代議員として選任する。なお、第4条第2項の推薦基準(1)から(3)の候補者については、前述の信任投票の結果が募集人数を超える場合には、再度投票を行い、獲得投票数の多かったものから順次当選するものとする。

●改定案

第6条選挙方法

3. 第2項の期間中に、正会員数の3分の1以上の異議の申出がなかった候補者について社員総会で信任投票を行い、3分の2以上の信任を得られたものを代議員として選任する。なお、第4条第2項の推薦基準(1)から(3)の候補者について、前述の信任投票の結果が募集人数を超える場合には、獲得投票数の多い順に選任する。

【改定案のポイント】

代議員選任の改定案では信任の必要条件を担保しつつ、1回の投票で代議員選任が可能となる。

上記を理事会、定款委員会の審議事項にすることとした。

## 肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループ

委員長 浜田純一郎

肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループの3回目の会合が2018年10月18日に開催され、2018年度11月から理事制の肩の運動機能研究会(以下研究会)を発足すべく、(1)会則の承認、(2)理事長、副理事長、理事の承認、(3)2018年の事業計画、予算案、(4)会員募集、入会金、会費の設定の4項目を全員一致で議決しました。しかし、肩関節学会社員総会では審議不十分のため発足は承認されず来年度に持ち越しとなりました。その主な理由は、(1)肩関節学会と研究会の組織関係が明確でない、(2)肩関節学会内に異なる予算体系が存在する、の2点でした。

上記の2点を解決する方法として、以下に述べる研究会の現状を考慮し2案を考えています。研究会の参加者は肩関節学会参加者を上回る1,000名を越し、この内の約200名はすべて肩関節学会の準会員、約200名が準会員ではない発表者、約600名が準会員ではない研究会の聴講のみの者という3層構造を呈しています。そこで、第1案は研究会会員を肩関節学会の準会員とし、肩関節学会内に医師が中心の肩関節学会(狭義)と理学療法士を主とした研究会があるという形にする案、第2案は現状どおりの準会員と新たな研究会会員の2本立てにするという考えです。3月までに両案のいずれが適切かをワーキンググループで結論を出し、5月の理事会に諮り、準会員の資格、会費、肩関節学会での発表・質問、雑誌肩関節の配布・投稿を含め新たな研究会の形をできるだけ早くお示しできるよう作業を進めてまいりますので、今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

## ▶ トラベリングフェロー帰朝報告

### JSS/ASES トラベリングフェロー

松村昇 慶應義塾大学整形外科

2018年9月16日から10月14日まで、北海道大学の瓜田淳先生とJSS/ASESトラベリングフェローとしてアメリカ7施設を訪問いたしました。とても刺激的な1ヶ月間で、貴重な経験をさせていただきました。私達が行きたい病院を見境なく指定した結果、西から東、北から南、さらに東から西から東、と移動はとてもハードになってしまいましたが、無茶な希望を叶えていただいたASESの関係者の方々には頭が下がります。1週間に2施設を回るため、月火に病院を見学、水曜朝見学した後に移動、木金に次の病院を見学し、土日に移動する生活の繰り返しとなりました。私は前半4施設に関して報告させていただきます。

1週前に台風で水没したガラガラの関西国際空港から旅が始まり、最初の週はロサンゼルス(Kerlan-Jobe Clinic)とニューヨーク(Hospital for Special Surgery)を訪問しました。ロサンゼルスではItamura先生やTibone先生の手術と、Thay Q. Lee先生のラボを見学させていただき、温暖な天候とともに充実したスタートを切ることができました。ニューヨークでは大御所のDavid Dine先生と、来年のASES meeting会長であるCordasco先生にホストになっていただき、私達にはもったないくらいの待遇に感銘を受けました。西海岸から東海岸への移動はフライト6時間の上に3時間の時差があり、飛行機乗るたび今が何時かわからなくなっていました。夜寝れず昼眠たい日々が続く上、手術がどの施設も7時ごろから開始するため、時差に慣れるまで体調はかなり厳しかったと記憶しています。

第2週はSECECからのトラベリングフェロー2名と合流し、計4名でTulane UniversityのSavoie先生と、Cleveland ClinicのIannotti先生を訪問しました。このような高名な先生方の手術を見学したり、食事を通して交流を深めたり、またプレゼンを聞いていただく機会を得ることができ、改めてトラベリングフェローの肩書きの偉大さを感じました。同時にSECECフェローの流暢な英語を目の当たりにして、英語力向上のための莫大な努力が必要であることを痛感させられました。

国土の広さや整形外科医の割合、保険制度など、様々な医療環境が異なるため全てを取り入れることは出来ませんが、とても刺激的で勉強になりました。また素晴らしいhospitalityなど、学ぶべきものが多かったです。この貴重な経験を今後の医師人生に生かし、精進していきたいと思います。最後になりましたが、このような機会を与えていただいた菅谷啓之委員長(現担当理事)をはじめとする国際委員会の先生方、お世話になった全ての先生方、不在の間にご迷惑をおかけした先生方、そして1ヶ月間私のわがままにお付き合いいただいた瓜田淳先生にこの場を借りて深謝いたします。この度は誠にありがとうございました。



ニューヨークにてDine先生およびCordasco先生と



ニューオーリンズのSavoie先生宅でのホームパーティー



Cleveland Clinicの手術室にてIannotti先生と

## JSS/ASES トラベリングフェロー

瓜田淳 北海道大学整形外科

2018JSS/ASES トラベリングフェローとして、慶應義塾大学の松村昇先生と2018年9月16日から10月14日までの4週間かけて7施設の見学とASES open symposium および annual meeting に参加して参りました。松村先生が最初の4施設を報告しておりますので私は残りの3施設と学会について報告したいと思います。

アメリカの時差にもだいぶ慣れてきた第3週はフロリダ州ゲインズビルにあるフロリダ大学とアリゾナ州フェニックスにある Mayo Clinic in Arizona を訪問しました。フロリダ大学では Thomas Wright 先生にホストをしていただき、手術、大学見学および工場見学と充実したスケジュールで迎えていただきました。フロリダ大学はスポーツが盛んで多くのオリンピック選手を輩出しており各施設が大変充実していました。手術はGPSナビゲーションを使用したRSAや再置換の症例を見せていただき大変勉強になりました(図1)。また、初日には Thomas Wright 先生の自宅でパーティーに招待していただきました。

フロリダの後はフェニックスに移動し Mayo Clinic in Arizona の John Tokish 先生を訪問しました。各滞在先で必ず上方関節包再建(SCR)について聞かれ、米国でのSCRの注目度の高さを実感していましたが、John Tokish 先生には実際にキャダバーでDermal allograftを使用したSCRをご指導いただきました(図2)。また、翌日には大腿筋膜を使用したSCRも見せていただき、人工関節の手術を多く見て来たためか非常に新鮮な手術に感じました。

最終週の前半はサンフランシスコの Tom Norris 先生を訪問させていただきました。到着した日は James Kelly 先生のご自宅での夕食会に招待いただきました。手術は残念ながら Norris テクニックを見ることはできなかったのですが、再置換やRSAの症例を多く見学しました(図3)。

最後はシカゴでのASES meetingに参加しました。ASES meetingはclosedのmeetingですので貴重な経験になりましたが、個人的には人工関節をテーマにしたopen symposiumが大変勉強になりました。

今回フェローに参加して感じたことは、各滞在先でのhospitalityの高さ、効率的な診療システム、レジデントやフェローへの教育など学ぶべき事が多く大変貴重な経験となりました。今後はこの貴重な経験を生かして日常診療や後輩の指導を行いたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本肩関節学会国際委員会委員長の菅谷啓之先生をはじめとする国際委員会の先生方、快く送り出してくださいました北海道大学整形外科上肢グループの先生方、そして4週間という長い間一緒に過ごしました松村昇先生に深謝いたします。



図1. フロリダ大学。Thomas Wright 先生の手術を見学。



図2. Mayo Clinic in Arizona. キャダバートレーニングの後に John Tokish 先生と一緒に撮影。



図3. サンフランシスコ。Tom Norris 先生の手術を見学。

## JSS/SECEC トラベリングフェロー

萩原嘉廣 東北大学整形外科

この度、SECEC(欧州肩肘学会)のトラベリングフェローに選出され、2018年9月19日～10月21日の日程で貴重な勉強する機会を頂きましたのでご報告申し上げます。

本トラベリングフェローは日本肩関節学会会員から1名が選出され、韓国肩肘学会から選出された1名とともにヨーロッパ各地の病院を周りながら研究発表・見学・討論・友好親善を行うことを目的とします。今回は日本から私、また韓国からはProf. Jae Chul Yoo (Samsung Medical Center, Sung-kyunkwan University) が選ばれました。約5週間の間にスイスのジュネーブで開催された the 28th SECEC-ESSSE に参加したのを皮切りに、スイス(チューリッヒ、Prof. Markus Scheibel およびサンクトガレン、Prof. Bernhard Jost)、イタリア(ミラノ、Prof. Alessandro Castagna)、フランス(リヨン、Prof. Lionel Neyton およびニース、Prof. Pascal Boileau)、イギリス(マンチェスター、Prof. Lennart Funk およびレディング、Prof. Ofer Levy)、スペイン(Prof. Emilio Calvo、マドリード)を訪問するという旅程でした。3-4日おきに荷物をまとめて次の訪問先に移動するという過酷なスケジュールであることに加え、大きな荷物をもっての電車移動と飛行機での重量制限とも格闘しました。各訪問先で数多くの人工肩関節置換術、鏡視下腱板縫合術、Latarjet法などを見学しました。論文、インターネットで勉強するのは異なり、いずれの施設も少しずつ独自に工夫をしておりました。特に鏡視下腱板縫合術は医療制度の影響を強く受け、single row法を行っているのが印象的でした。また、人工関節については独自に開発中の製品も見せていただき、新製品開発が身近な印象を受けました。そして、すべての訪問先で現地医師と最新の研究発表を行い、意見交換ができたことは非常に有意義でした。身体所見(特に関節可動域)については私が行っている方法とはギャップがあったこと、また、我々が行っている基礎研究の臨床応用について議論しました。各地域での文化的背景も治療方針に大きく影響しており、唯一無二の治療法を強調するのは得策ではありません。

各訪問先で学術的な交流以外にも重要なのは友好親善です。多くのホストから非常に温かく歓迎され、観光名所や様々な食文化、歴史に触れることができました。各施設のフェローは世界各国からきており、本当の意味での国際化が一般的な印象を受けました。訪問地以外の文化交流ができたのは貴重な経験でした。

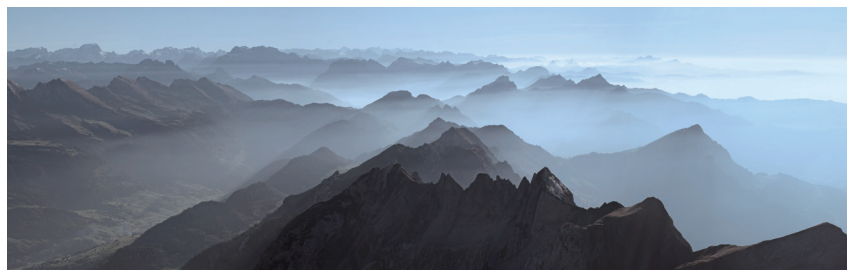
最後になりますが、長期にわたる不在をお許しいただいた井樋栄二教授をはじめ、留守中のサポートをいただいた同門の先生方に心より感謝申し上げます。ここで得た経験を今後の臨床、研究に活かし、日本の良い点を世界にアピールしてゆく所存です。



ジュネーブ駅からの出発。Dr.Yoo(右)と著者(左)



SECECでの韓国ドクターたちとのディナー。



Mt.Santis(スイス)からの眺め



## ▶ KSES/JSS トラベリングフェロー

### 2018年 KSES Japan Traveling Fellow から帰国して

ノ・ギュチョル 翰林大学校医療院 江南聖心病院

天高く馬肥ゆる秋の日。

2018年 KSES Japan Traveling Fellow に選出され、2018年10月8日から11月4日までの4週間、ソウル大学病院の Sae Hoon Kim 教授（キム・セフン教授）と共に、仙台を皮切りに、札幌、名古屋、京都、大阪、そして大阪国際会議場で行われた第45回日本肩関節学会（以下 JSS）参加後、再び東京、福岡、広島、熊本、久留米など、10都市20カ所の病院を訪問した報告をさせていただきます。

金浦空港から出発し、到着した東京の羽田空港では、JSSの事務局スタッフの出迎えに深い感動を受けました。また、飛行機や新幹線、地下鉄だけでなくタクシーまで手配して頂くなど、日程ごとにきめ細やかな御配慮をして頂いたのがとても印象的でした。

東京から仙台に到着して、井樋栄二先生の外来に参加しました。昼食後、Cadaver Research Labにおいて、政府支援による遺体寄贈を受けて Biomechanical Study を行っている過程を見学しました。夕方には井樋栄二先生のご自宅に招かれ、韓国料理を食べながらパイプオルガンの演奏を聞くという貴重な経験をさせていただきました。

札幌で出会った末永直樹先生は、とても熱心に新しい Concepts をもとに臨床研究を進めておられ、Arthroplasty with Reconstruction の重要性について強調されていました。岡村健司先生は優れたリーダーシップで病院を家族のように導き、事業手腕も優れており経営者としても成功されているようです。

“名古屋のジェントルマン三人衆” 杉本勝正先生、後藤英之先生、土屋篤志先生は互いに協力し合い、Arthroscopic Bristow Reconstruction 手術を我々に見せてくれました。また、臨床研究においてもお互い助け合いながら遂行しているようでした。

京都の森原徹先生は、Arthroscopic Assisted Modified Debye-Patte Procedure に強い確信を持っておられ、PRP と BMAC の研究を進めていました。

大阪の三幡輝久先生は、Tensor Fascia Lata を用いた SCR を考案したドクターとして、SCR の Indication を広げるだけでなく、その根拠となる臨床研究に情熱を注いでいて、世界中からこの手術を見学するために多くの人が訪れていることに改めて驚かされました。

大阪国際会議場で開催された第45回日本肩関節学会では、Traveling Fellow として発表するという光栄な機会を得ることができましたが、発表の場がメインホールではなく、小さな Conference Room5 であったため参加した人数があまり多くなかったのが残念でした。

今回、日本肩関節学会学術集會に参加して感じたことは、韓国の学会よりも規模が大きく、理学療法士と作業療法士を含めて、より柔軟に学会を運営していることです。また、日本の学会そのものが国際化に向け非常に努力しているという点です。韓国の肩・肘関節学会の国際化に大きな影響を受けて、英語でのセッションが増え、日本語で発表する国内のセッションにおいてもスライドはすべて英語で表記されていました。

東京では、高瀬勝己先生と一緒に市内の浅草寺を観光し、東海大学病院で内山善康先生の Hemiarthroplasty with LD Transfer を見学し、船橋整形外科病院では、菅谷啓之先生に Suture Bridge Repair、Reverse Shoulder Arthroplasty for Cuff Tear Arthropathy、Bankart Repair with Remplissage を見学させていただき、世界各国から集まった Fellow と一緒に楽しそうに勤務されている様子は日本の中のグローバル化を見ているようでした。昭和大学藤が丘病院では、長年の友人である西中直也先生と会うことができ、とても懐かしく、Elbow Arthroscopy では実に見事な Stiff Elbow Adhesiolysis を見せてくれました。また、望月智之先生とは長年の旧友のように家族の話や、子供達の話

をしながらゆったりとした時間を持つことができました。

福岡では前理事長であった柴田陽三先生が新しく改装された病院でも意欲的に取り組まれ、副院長として多忙なスケジュールの中、私たちに気を使っていたいただきとてもありがたく思いました。以前、柴田先生ご自身が Europe Traveling Fellow 時に私たちと同じ経験をされたからこそ、私達の状況や心情を理解されていると聞きました。私たちの訪問時に、先生の御子息が書かれた博士論文が採択されたと喜ばれる姿を拝見し、カリスマ教授ではなくごく普通の家庭の父親としての姿を感じることができました。伊崎輝昌先生はまるで近所のお兄さんのように親しみやすく穏やかで、韓国文化や、私たちの話にとっても興味深く耳を傾けてくれました。

広島は菊川和彦先生とは午前宮島を観光し、午後には18歳女性のラグビー選手の AS Bankart Repair with Remplissage を見学しました。夜は広島市民球場で広島東洋カープと福岡ソフトバンクホークスの日本シリーズを直接観戦させていただきなど完璧なスケジュールを立てていただきました。横矢晋先生は Arthroscopic Assisted Modified DeBeyre-Patte Procedure with Allograft Augmentation について研究発表されて、互いに議論し、また、夕方の研究ミーティングでは望月由先生が参加され会合を取り仕切るだけでなく、夕食の席でも先輩として広島の先生たちの強い絆を示されました。

熊本では、Galapagos Doctor (日本のガラパゴス携帯電話の進化に喩えて) である北村歳男先生の Mini-Open Bristow Reconstruction を見学させていただき、私も一緒に手術に参加することができ手術を成功させることができたことは嬉しかったです。その際手術中に多くの有意義な議論を通して、先生の豊富な知識と哲学を知ることができ、個人的にもさらに親しくなれたので大変良かったです。また午後には、2016年に起きた大地震により破壊された熊本城の大災害の爪痕を見て、厳かに故人の冥福を祈り一日も早い復興を祈りました。

高岸直人賞を受賞された菊川憲志先生らの MRI appearance of teres minor in cuff tear の研究発表も聞いて討論する時間を持つことができました。

最後の訪問地である久留米では、後藤昌史先生の Full-thickness rotator cuff tear : FTRCT、Cuff evaginated chronic traumatic tear に対する鏡視下修復術を見学させていただきました。そして、久留米で有名なとんこつラーメンを食べながら、この一ヶ月間の日程を整理し空港に向けて出発しました。

地理的に見ると、日本列島の中に北海道や九州のような大きな島があり、本州とは異なる印象を受けました。各地域別に特徴的なそれぞれ違った祭りがあるように、医療においても、患者の治療においても各地域ごとによりかなりの差がありました。例えば、Irreparable Massive Cuff Tear の治療においても Superior Capsular Reconstruction、Hemiarthroplasty with Tendon Reconstruction、Arthroscopic Assisted Modified DeBeyre-Patte Procedure、Partial Functional Repair、Reverse Total Shoulder Arthroplasty など地域ごと、また教授ごとに大きな違いがあり、それぞれのグループにおいて素晴らしい研究結果を発表されました。つまり、すべての病院のすべての教授がそれぞれ自分だけのノウハウを持ち、学ぶことのない手術は一つもないことを感じました。

関節鏡手術時、Portal はほとんどの場合4つ使用しますが、cannula は、ほとんど使用しないか、または working portal 1つ程度にだけ使用していました。興味深いのは、Rotator cuff repair 時は、Medial row knot tying をする方が少なく、Scorpion や Express などの器具を使用せず Suture Hook を多く使用していることでした。

個人的な見解ですが、日本の会員の手術件数は韓国に比べてはるかに少ないということです。手術件数が非常に多い船橋整形外科病院ですら韓国の活動的な大学病院の教授ほど多くありませんでした。保険の問題や伝統的な医師の治療行為による差があるものと考えられます。

また、韓国で活発な Reverse total shoulder arthroplasty は、2014年になってようやく日本の独立行政法人医薬品医療機器総合機構の許可がでて、徐々に手術件数が増加している資料を見ましたが、興味深いのは RSA 手術登録システムがあって、日本人工関節学会において資料として保管しようと努力している

ことです。

なお、手術後のほとんどの患者が公的健康保険でカバーされる、肩関節専門の理学療法士による手術後のリハビリ治療を受けていましたが、これは韓国の劣悪なりハビリ治療の数と設備を考えると、改善して見習うべきであると思いました。

訪問したすべての場所で教授や先生方が直接出迎えてくださり、列車の座席番号まで事前に調査して、降りる列車のすぐ前で出迎えてくれたことにはとても感動しました。また各地域の郷土料理で、もてなしていただき、有名な観光地まで直接案内していただきました。前日現地では何を食べたかということまで気にして、メニューが重ならないように配慮していただき、各地域の先生方を招待して、ほぼ毎日会議や会食があり楽しかったのですが、その半面強い精神力と体力を必要としたのも事実です。今後 KSES Japan Traveling Fellow 候補者は、事前に健康診断と体力検査でもしなければならぬほどです。訪問中に6回の講義をしましたが、キム・セフン教授は、巧みな話術と多くの経験、優れた英語力に、現地の若い医師たちだけでなく、招待して頂いた教授にも多くのことをご教授いただき、私は前向きな気持ちで互いに助けになるテーマで講義し、さらに親しくなることができました。

最後に、一生忘れられない経験をさせていただいた韓国の肩・肘関節学会と、生れて初めて同性と二人きりで4週間もの間、生活を共にしながら、お互いに協力し合い強い絆を感じさせてくれたキム・セフン教授にも感謝を申し上げます。

日本語訳：山田珠代（熊本整形外科病院スタッフ）



東北大学の先生たちと



名古屋市立大学の先生たちと



福岡大学筑紫病院の先生たちと

## 親愛する JSS member 皆さん

キム・セフン ソウル国立大学病院

私は2018JSS トラベリングフェローだったキム・セフンです。行って来たのが昨日のようだがもう多くの時間が過ぎました。

まず、日本の先生方々に感動したともう一度申し上げたいです。本当の "micro-management" が何なのかを私に見せてくれました。その数多くの歓待と親切さをすべて報いることはできないでしょうが、これから学会活動をしながら韓国と日本の先生たちの架け橋の役割を一生懸命にし、交流において努力します。

皆さんにご挨拶申し上げて伺うことはできませんが、ぜひ韓国に来られたり、また私がまた日本を訪問して挨拶してその時の思い出を思い出します。

もう一度、真なる招待と歓待に感謝します。

2019年にはすべてほしいものが全て叶えられることを願っています。

Respectfully,

Sae Hoon Kim from Seoul National University Hospital

\* Sae Hoon Kim 先生からいただいた日本語をそのまま掲載しております。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

Noh 先生と Kim 先生より寄稿いただいた韓国語の原文や写真、その他の寄稿については下記のリンク先に掲載しています

노규철선생님과 김세훈선생님께서 기고해 주신 한국어 원문과 사진, 기타 표는 이하의 링크처에 게재되어 있으니 참고해 주십시오.

[http://www.j-shoulder-s.jp/docs/2019/01/KSES\\_TravelingFellow.pdf](http://www.j-shoulder-s.jp/docs/2019/01/KSES_TravelingFellow.pdf)

編集

広報委員会

後記

大前博路

明けましておめでとうございます。「平成最後」のニューズレターになりました。昨年は豪雨による土砂災害や台風による閑空の水没、さらには各地の地震など多くの災害に見舞われました。一方で2025年の大阪万博の開催決定などの朗報もありました。5月1日からの新年号が何になるのか楽しみです。新しい時代が喜びに満ちた時代になるように願います。

今回のニューズレターは池上新理事長をはじめ、就任された理事、監事の先生と新たに代議員に選出された先生のご挨拶文が掲載されており、いつもよりボリュームの多い号となっています。ご挨拶文からは執筆された先生のお考えやこれまでのご功績を知ることができ、各委員会からの報告文からは多くの先生方が学会をより良くするために力を注いでおられることがわかります。またトラベリングフェローの報告からは海外の肩関節外科の状況を知ることができます。今回はKSESからのフェローのKim先生とNoh先生の報告もあり、海外から見た日本の肩関節外科について記載されています。読み応えのある内容ですので、ぜひみなさんご覧になってください。

最後になりますがご多忙の中、多くの先生にご寄稿いただきありがとうございました。本号の編集にあたってご尽力いただいた広報委員会の先生方、学会事務局の皆様に深謝いたします。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会 広報委員会

望月由（担当理事）、北村歳男（委員長）、新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、国分毅、小林勉、夏恒治、西中直也、松浦恒明、村成幸

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL03-6369-9981/FAX03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL <http://www.j-shoulder-s.jp/>